

## (16) 言葉とともに漢字を学ぶ

### 一歳児が200の漢字を！

石井式漢字教育の中心的指導者の一人で、沖縄の幼稚園長をしていらっしやった故又吉信一先生は、長男の孝旨君に、生後八か月くらいの時から漢字カードを読んで聞かせることを試みました。

そして半年ほどたった生後一歳二、三か月の頃、私が会った時には孝旨君はすでに200枚の漢字カードを覚えていて、一枚一枚ちゃんと読み分けて見せたので、私はすっかり驚いてしまいました。

普通、幼児は、生後一年半くらいでは「ウンマ」とか「マンマ」とかというような幼児語が、30語も言えたら立派なものだ、と一般に考えられています。私も自分の孫でこれを確かめてみましたが生後一年半の時には30くらいの幼児語がやっと言える程度でした。

それにひきかえ、孝旨君は一歳半の時には300字の漢字が読めるようになっていましたから、「漢字によって言葉を教えれば、普通に覚える言葉の量の十倍もの言葉が覚えられる」ということになります。

このすばらしい言語能力は幼児にただ言葉を語りかけるだけでは、決して得られるものではありません。前に述べた“脳障害児”の場合と同じく、目で見える言葉は覚えるまで消えずに待っていてくれるから覚えられるのであって、それが耳で聞く言葉に結びつくからです。

こうして、耳で聞く言葉と目で見える言葉である漢字とが、耳と目という

二つの異なった器官を通して大脳にあるそれぞれの神経中枢に受け入れられるから、強固な記憶のネットワークが構成され、記憶が取り出しやすくなるのです。

私も孫の教育に当たっては、特に言葉の教育を重視して、一日も早く“おじいちゃん”と呼んでもらえるよう家族に協力を求めましたが、一歳半の時にはまだ“おじいちゃん”という言葉が言えるようになりませんでした。

ところが、孫が一歳半になった日を機会に、漢字を教えることを始めましたところ、一週間もたたないうちに“おじいちゃん”と、はっきり言えるようになりました。

この事実は、言葉と、その言葉を表わす漢字と、この二つを一緒に幼児に教えてやった方が、ただ言葉だけを教えてやるよりも、幼児にはずっと覚えやすい、ということを実証するものであると同時に、漢字を覚えてこれを読むという仕事が、大脳の働きを活発にして、他の別々能力まで引き出し、伸ばすことを証明していると思います。

すでに述べたように人間は「言葉によって物を見、かつ考える」ものですから、同じ一歳半でありながら、理解している言葉が30語対300語という大差があったのでは、この時期における幼児の観察力や思考力の発達に大変な差が生ずることは疑いありません。ここにぜひ注目していただきたいと思います。